

古墳の動向から古代国家成立の謎を探る

教育学部 柳沢 一男

はじめに

東北地方以北と南西諸島を除く日本各地に、15万～20万に達する高塚系墳丘墓＝古墳が広域に分布する。全長が200 m、高さ20 mを越え小山のような偉容の大型古墳も少なくない。

日向には170基を上回る前方後円墳のほか膨大な数の古墳がつくられており、とくに西都市にある西都原古墳群は全国的にも著明である。なかでも墳長180 mにも達する女狭穂塚古墳は九州最大規模だが、何故これほどの大型古墳がこの地につくられたのか謎だ。

古墳は人工的に築造された墳丘と、その内部に遺体埋葬用の施設が設けられた構造物(墳墓)である。3世紀後～末葉に始まり、7世紀までの約300年間にわたって継続してつくられた。この墳墓の築造が盛行した約300年を古墳時代と呼んでいる。

古墳には前方後円墳や円墳・方墳など多様な形があり、その規模も長さが400 mを越える巨大なものから、10 mに満たない小型のものまでである。埋葬施設も各種あるほか、遺体に添えられる副葬品も多様で、時代によって構成内容も変化している。

このような墳丘規模や埋葬施設の多様性は、築造年代による変化とともに、大王から各レベルの地域首長さらには有力な共同体成員にいたるまでの、埋葬された人々の身分的階層性を表示する。つまり、古墳のあり方は当時の社会の諸関係を、墓制上に象徴的に表現している。したがって古墳研究は単に墓制研究にとどまらず、8世紀初頭に成立する律令国家以前の列島社会の構造や展開過程を考える上で重要な意味をもつ。

ここでは、日向の政治的中枢部を形成した一ツ瀬川と大淀川流域の主要古墳群の動向をとおして、律令国家成立のプロセスを探ることにしたい。

2. 日向の古墳概要

日向の古墳分布とその特徴

九州島の東南部の日向には、古墳時代(3世紀後葉～7世紀)を通じて多数の墳墓がつくられている。現在知られている古墳の数は、約1600基の高塚系古墳(人工的な高まりをもつもの)のほか、明確な墳丘をもたない

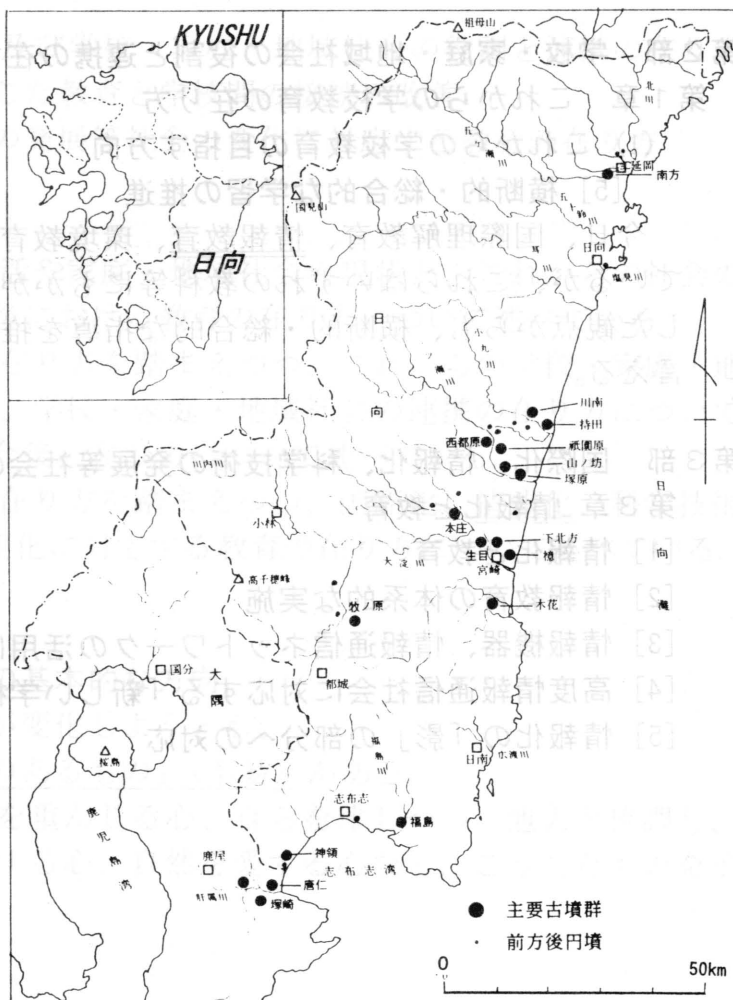


図1 日向の主要古墳群分布

ちかしきよこあなほ
 地下式横穴墓が約 600 基と横穴墓の約 1100 基である。これらを併せると約 3400 基あまりとなる。ただし地下式横穴墓は今後の調査によって増加する可能性が大きいから、こうした数値は現状での目安としておくほかない。

古墳の主要な分布域は、五ヶ瀬川・小丸川・一ツ瀬川・大淀川・川内川などの大河川流域の沖積低地と、その周縁の台地や丘陵部である。横穴墓は宮崎平野以北の日向灘に面した平野部縁辺が多く、また地下式横穴墓は加久藤盆地から都城盆地にいたる内陸部に集中する傾向がある。しかし、古墳が古墳時代の始まりから出現しているのに対して、横穴墓や地下式横穴墓は古墳時代の後半期になって登場した新しい墓制という年代的な違いがある。だが、後半期の墓制にこのような地域差があることは注意しておきたい。

古墳時代の日向といっても、古墳はどの地域にも万遍なくつくられておらず地域的偏差がいちじるしい。古墳の数は当時の人口分布と一定程度比例するが、必ずしも正比例の要件をみたいしていない。それは、墳墓に対する意識や、古墳を築造しうる階層分化の進行状況や首長層の成長度などの違い、そして何よりも古墳によって社会的身分秩序を表現する政治システムへの関わりかたが、それぞれの地域の個性としてあらわれる。

地域の個性を考えるために、まず延岡平野と宮崎平野の特徴的な古墳群を対比してみよう。

延岡平野では、市街地西方の五ヶ瀬川流域と北方の祝子川沿いに古墳が分布する。五ヶ瀬川沿いに点在する一群は南方古墳群として国史跡に一括指定されているが、正確な意味での古墳群ではない。この地域では、舞野・吉野・天下・野地・大貫など、それぞれ地理・地形的に完結する空間＝小地域を単位として数基ないし十数基の古墳がまとまる。

舞野古墳群は組合せ式石棺を埋葬施設とした数基の小型円墳からなり、吉野古墳群では刳抜式や組合せ式石棺が知られている。天下古墳群は70mクラスの2基の前方後円墳を中心に10基

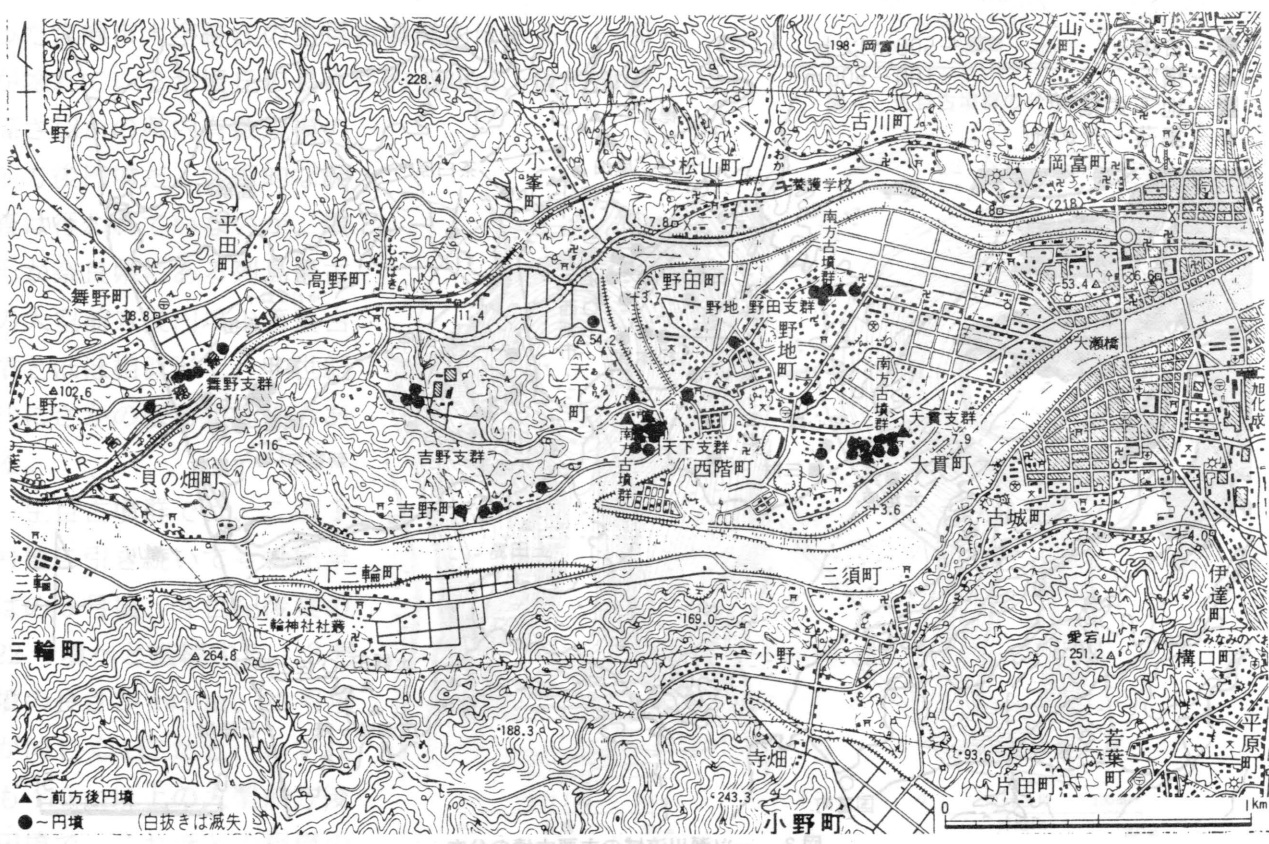


図2 五ヶ瀬川流域の古墳分布

の古墳で構成されている。野地古墳群は1基の小型前方後円墳のほか中型円墳や小型円墳がある。また野地には樹立した古墳は明らかでないが日向唯一の人物形石製品が現存する。大貫古墳群は前方後円墳の浄土寺山古墳のほか、日向では数少ない横穴式石室墳がある。

このような古墳群のありかたは、小地域を基盤とする首長らが自らの勢力地内に墓地を営んだことを示すものであろう。そのなかで注目したいのは地域をこえて大中型の前方後円墳が点在することだ。規模に多少の違いがあるが、天下に2基、大貫に1基、野地に1基の前方後円墳がある。発掘調査やの成果や墳形から、野地のものが4世紀半ば、天下1・2号墳が4世紀後葉から末にかけて、大貫の浄土寺山古墳が5世紀半ばの築造と推測される。天下と浄土寺山のあいだに時間的空白があるが、おおむね25年の四半世紀前後に1基の割合で前方後円墳が築造されている。前方後円墳を各小地域をこえて下流域一帯を統括する首長墓と考えるならば、この地域の首長の地位は特定集団に固定せず、小集団のあいだを移動したとみることができる。つぎに日向を代表する一ツ瀬川流域をみておこう。

宮崎平野部の中央にあたり、河口部の新富町から10kmほどさかのぼった西都市にかけて膨大な数の古墳が知られている。西都市の茶臼原・西都原・三納・三財、新富町の祇園原・山ノ坊・石船・塚原などが主要な古墳群である。前方後円墳はこの流域だけで74基もあるし、西都原古墳群に九州最大規模の女狭穂塚古墳を含んでいる。

なかでも西都原古墳群(総数311基)は古墳時代前期から中期前葉にかけての、また祇園原古墳群(総数154基)は後期の大型前方後円墳が継続的に築造され、この地域で最有力の古墳群である。このように多数の古墳で構成される古墳群は、一小地域単位の勢力の墓地ではなく、複数の地域小集団をいくつも含んで形成されたであろう。詳細は略すが、西都原古墳群では前期段階において六つの首長墓系譜がみつめられる。

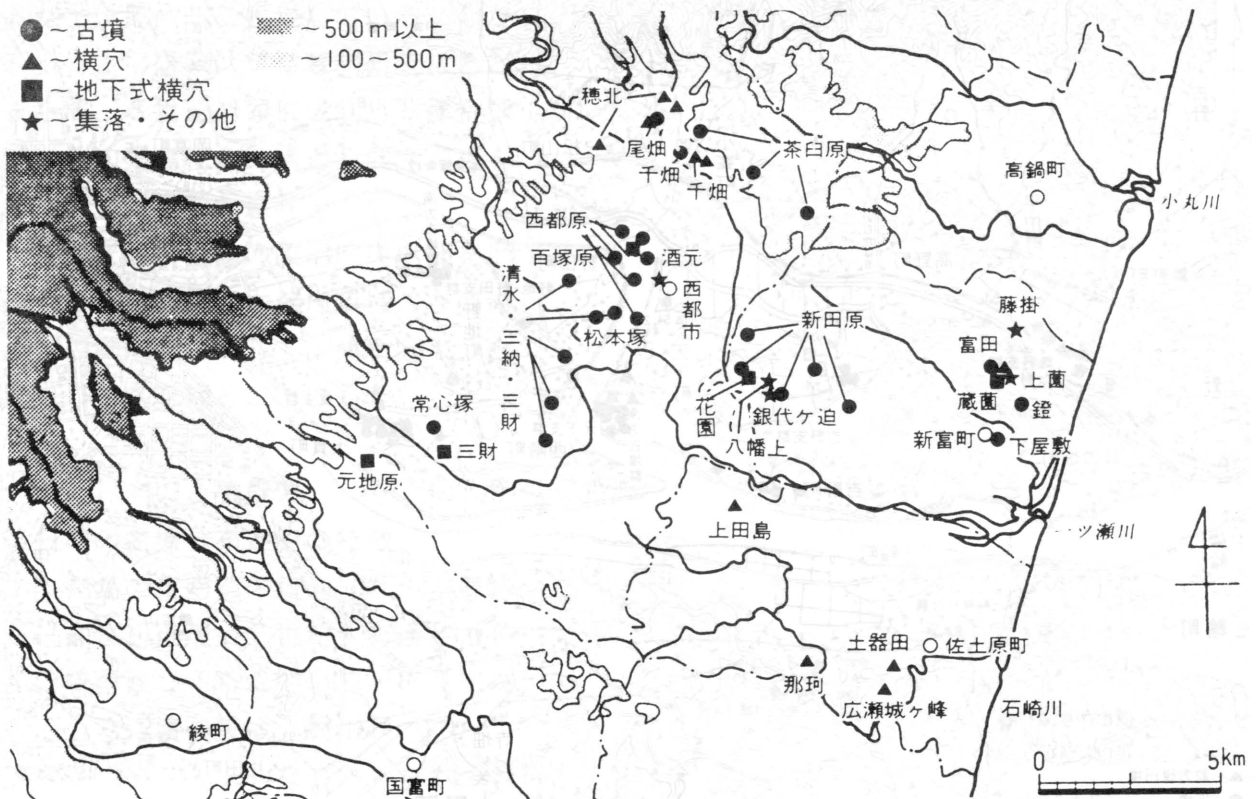


図3 一ツ瀬川流域の主要古墳の分布

一ツ瀬川流域は広い沖積低地を控えた有数の稲作地帯であり、弥生時代後半期に環壕集落が形成されるなど有力な政治的集団が形成された可能性が高い。さらに、律令体制下の児湯郡における郷の設置数からわかるように、日向でもっとも突出した人口集中域であり、後述する大淀川流域とともに古墳時代日向の政治的中心地を形成しえたと考えられる。

3. 大淀川と一ツ瀬川

宮崎県内の古墳分布は先にその概要を述べたが、広義の宮崎平野部でも大淀川流域と一ツ瀬川流の二つの河川流域は、他地域にまして大型前方後円墳の集中が顕著である。宮崎市街地が広がる大淀川下流域には生目古墳群や下北方古墳群が、また一ツ瀬川下流域は西都原古墳群と祇園原古墳群（新田原古墳群の一部）がある。前方後円墳の規模と数において突出したこの地域が、古墳時代を通じて日向の政治的中枢を形成したとみてよいだろう。

古墳出現期の状況

県内最古の古墳を具体的に絞り込むことは難しいが、最古の大型前方後円墳は宮崎市にある生目1号墳の可能性がきわめて高い。

この古墳は大淀川河口から約10kmほどさかのぼった宮崎市大字跡江の生目古墳群内にある。一部が壊れているが墳丘の長さが約120m、後円部の高さ12mの県内有数規模の前方後円墳だ。学術的な調査は行われていないが、墳形が奈良県にある列島最古の大型前方後円墳の箸墓古墳とほぼ相似形で、3世紀代にさかのぼる可能性もある。

生目古墳群では、この1号墳に引き続いて4世紀半ばの3号墳、4世紀後葉の22号墳へと継続する。3号墳の長さが143m、22号墳が同じく117mと、いずれも110m以上の大型前方後円墳で、これほどの規模の



図4 生目古墳群の分布状況

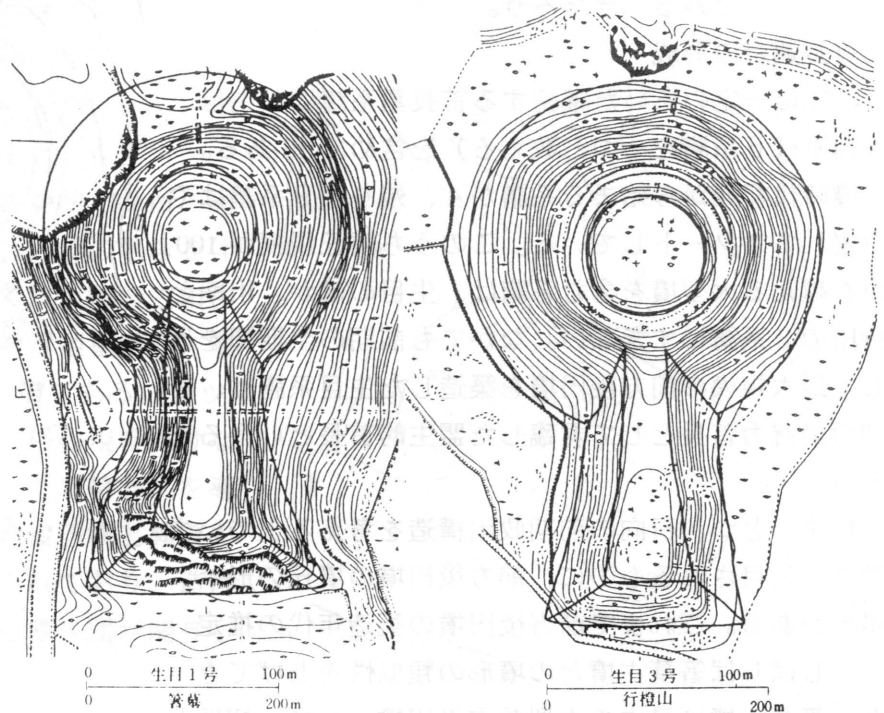


図5 生目1号墳と箸墓古墳（左）、同3号墳と行燈山古墳（右）

前方後円墳が連続する首長墓系譜は、県内はおろか九州でも例をみない。ちなみに、生目3号墳は前期古墳としては九州最大の規模である。

生目古墳群で大型前方後円墳が継続していた頃、一ツ瀬川流域の状況はどうだったのか。

西都原には六つの首長墓系譜があることを先述した。その6系譜の前方後円墳は出現時期に多少の年代差があるが、いずれも前半代のうちに築造が始まったとみられる。発掘調査による確証はえられていないが、100号墳や91号墳などは箸墓古墳と相似形の可能性があり、生目系譜と同様に早くから古墳築造が始まったのであろう。各系譜は前期後葉ないし中期初頭まで継続するが、多くは墳長60～80mクラスで、100mを越える首長墓を築造することがなかった。前方後円墳の墳丘規模が築造勢力の実力差を示すとするならば、一ツ瀬川流域の諸勢力の政治的立場は、大淀川を基盤とする生目勢力よりも下位に留まっていたとみるべきだろう。

首長連合の形成

前期に一定のあいだ継続する首長墓系譜は、生目・西都原（6系譜を一つと数える）を含めて13ある。古墳時代初頭から始まる系譜が4、残りの9系譜はやや遅れてスタートしている。このうち墳丘規模が100mを越える大型墳を含む系譜は、生目のほか、川南と持田の2系譜にすぎない。なかでも前期の全期間を通じて最大規模の前方後円墳を築造した生目系譜は、日向の最有力首長として君臨した盟主的首長といえるだろう。

いまひとつ、日向の前期政治構造を考える上でいまひとつ注目されるものに、前方後円墳の墳丘の形＝ふんけい墳形がある。これまで前方後円墳の築造年代の推定に、しばしば箸墓古墳との墳形の類似性をあげてきた。箸墓古墳は最古の大型前方後円墳として、初期ヤ



図6 西都原古墳群分布図(台地上位面)

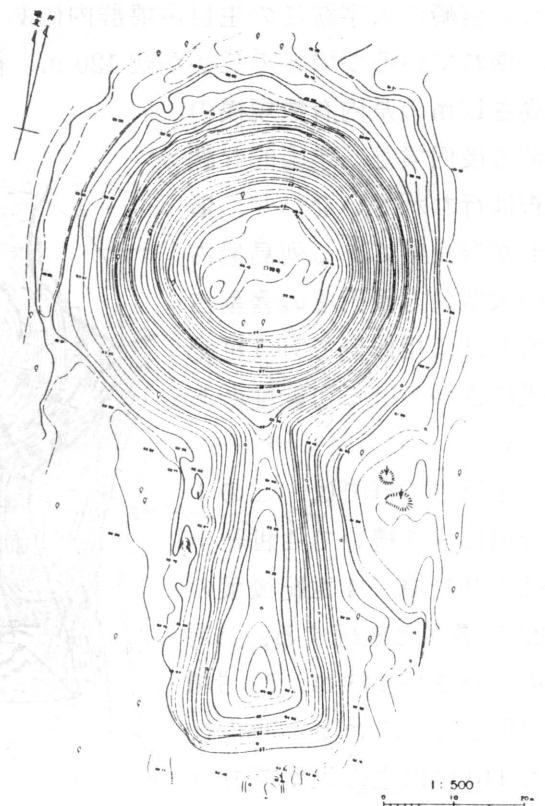


図7 柄鏡形墳形(西都原90号)

マト王権の王墓と認められ、王墓の墳形は王の代替わりに変化することが明かにされている。王権所在地から遠く離れた地域の首長墓でも、特定の王墓と相似形の墳形を採用した古墳は王権と親密な関係にあると予想され、築造年代も近接することが判明している。

ところが特殊な事例として、王墓の前方後円墳と異なった墳形に限られた地域に特異に広がる可能性がある。日向もその一例で、前期の半ばまでは王墓の墳形を積極的に摂取しているが、後葉になると柄鏡形えかがみがたと呼ぶ墳形が大流行している。この墳形は、前方部が先端に向かって広がらない細長い平面形（前方部の長さが墳丘の長さの1/2になる）と、墳頂が平坦なことを特徴とし、4世紀後葉の早い段階に日向地方で独自に編み出されたと考えられる。その後約半世紀のあいだ、日向地域の前方後円墳のほとんどがこの墳形を採用している。

前方後円墳築造にあたって、大小を問わず共通の柄鏡形墳形を採用した背景は、この頃の日向諸首長間に強い政治的関係が生まれたことを推測させる。柄鏡形という特定墳形の共有は、なんらかの共通利害によって結合した首長連合と呼ぶべきものであろう。首長墓の規模を含めて考えると、この段階の首長連合の最高首長＝盟主的首長の座は以前からの生目系譜にあったと予想されるが、持田・川南系譜にみられる大型墳の存在も無視しがたい。前期後半には、生目系譜の圧倒的地位が相対的に揺らいでいることを示していよう。

各首長系譜の動向を逐一述べる余裕がないため、系譜ごとに前方後円墳の築造順を整理した図を掲げておく（第9図）。

首長系譜の変動

4世紀代に勢威をふるった生目古墳群は、22号墳ののち前方後円墳の築造が中断する。

一方、一ツ瀬川流域の西都原古墳群では、4世紀代に継続した六つの首長墓系譜が不明瞭な一つの系譜を除いて、5世紀を前後する頃に前方後円墳の築造をいっせいに停止する。そしてその直後の5世紀前葉に、台地中央部に男狭穂塚・女狭穂塚の二つの巨大古墳が登場する。

女狭穂塚古墳は墳丘の長さが約180m、周囲に周堀と周堤をめぐらし、方墳の陪塚を伴なう。墳形は柄鏡形ではなく、大阪府古市古墳群にある仲ツ山古墳なかつやま（現仲津姫皇后陵、墳長286m）の約2/3の相似形墳である。仲ツ山古墳の相似形墳としては破格の規模だけでなく、日向で初めて定型化した埴輪祭式を導入するなど、それ以前の前方後円墳と異質の設計原理にもとづいてつくられており、造営にあたって王権に直属する造墓集団が関与したとみられる。

男狭穂塚古墳は墳形が前方後円墳か否かで



図8 女狭穂塚（下）と男狭穂塚古墳（上）

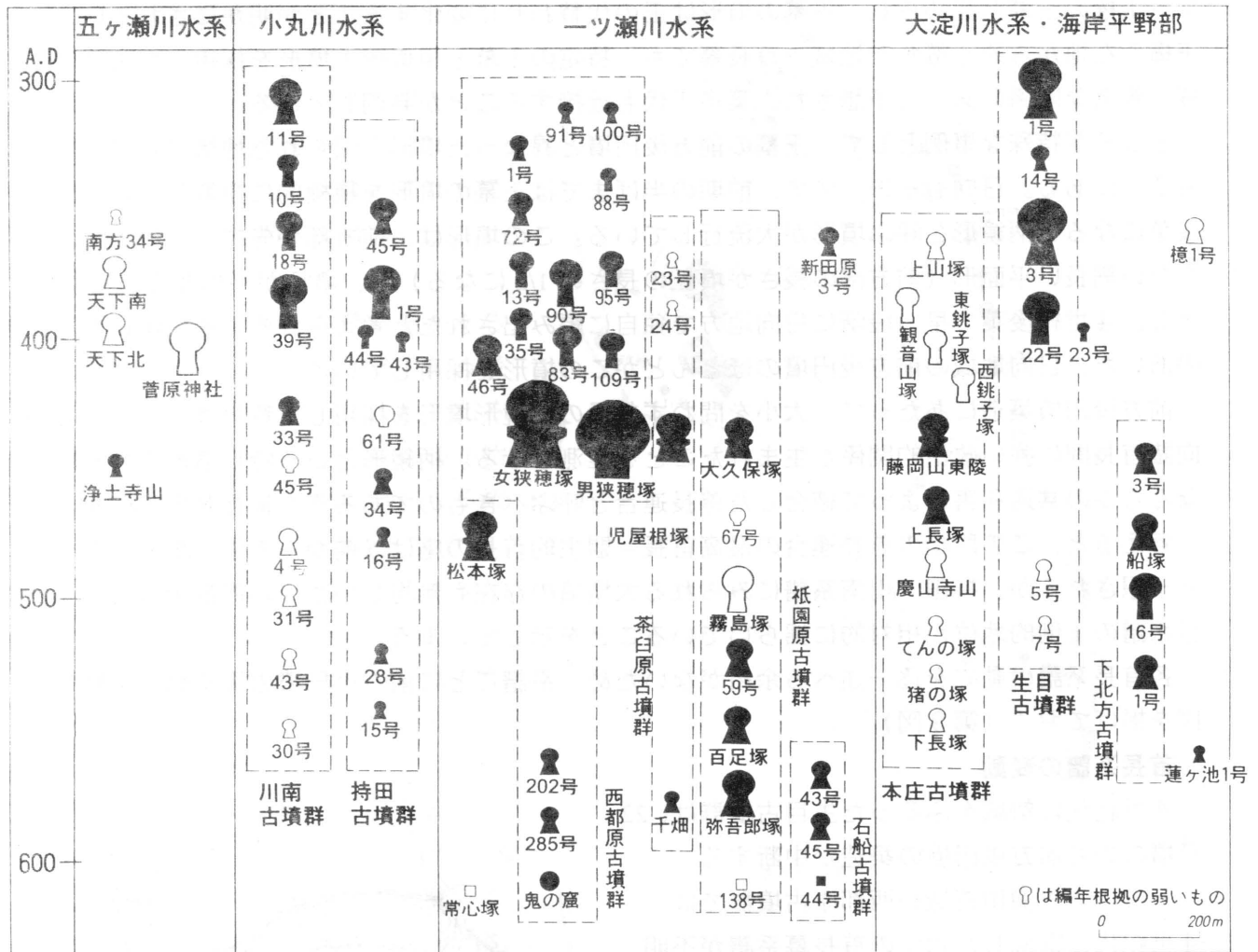


図9 日向の主要首長墓系譜の消長

議論があったが、墳長約 160 m 程度の造出し付き円墳もしくは帆立貝形古墳とみるべきだろう。^{ほたてがい}この墳形としては日本最大規模である。2重の周堀をめぐるし、墳丘に埴輪を立てている。

この2基のいずれが先に築造されたか現状では判断できないが、短期間の内に相前後してつくられことは間違いない。この2基の古墳が登場した時期に西都原から首長墓系譜が姿を消した事実は、それまでの六つの首長系譜が一勢力に再編されたことを示す。

こうした西都原古墳群の変動のほか、生目古墳群にみられる首長墓系譜の中断、さらに諸系譜の首長墓規模の変化などが、5世紀を前後していっせいに起こっている。これらが、それ以前に柄鏡形墳形を共通とした首長連合内での出来事である以上、これらの動きが偶然に重なったとはみなしがたい。

以上の多様な変動は、柄鏡形墳形で象徴される旧来の首長連合の解体と再編が、女狭穂塚に象徴される西都原の新系譜によってすすめられたこと、西都原の新系譜による他系譜の首長墓築造規制などを物語る。この盟主権の移動をともなった変動は、前期の日向首長連合の盟主権をめぐるクーデターというべきだろう。

ここで注意されるのは、クーデター推進者が埋葬されたであろう女狭穂塚古墳の墳形が仲ツ山古墳の相似形墳という点である。仲ツ山古墳は、5世紀を前後する頃にヤマト王権が河内に墓域を移したのちの最初の超大型古墳である。大和から河内へという墓域移動に関しては諸説

あるが、王権内部の政治的変動をともなったとする所論にもとづけば、日向の一連の動向も王権の変動に連動した出来事であった可能性が高い。

首長連合の解体

女狭穂塚古墳の築造を契機に、5世紀前葉から半ばにかけて、一ツ瀬川流域に^{こやねづか}児屋根塚古墳(110 m)や祇園原 92 号墳(大久保塚、85 m)、本庄川流域の^{ふじおかさんひがしりょう}藤岡山東陵(90 m)など、これまで小型墳しかみとめられなかった古墳群に大・中型前方後円墳が出現した。それらは、女狭穂塚の墳形ときわめて類似するのが特徴的だ。おそらく西都原系譜のもとで新たに台頭した首長勢力とみとめてよいであろう。

女狭穂塚・男狭穂塚古墳ののち、西都原系譜の首長墓は西都原台地をはなれる。5世紀後葉の松本塚古墳は西都原台地の西 2 km の沖積低地にある。墳長が 104 m、周堀と周堤をめぐらし陪冢群をともなうなど、他系譜の首長墓と比べると規模と格式の点ではるかに凌駕している。その後の西都原系譜は、一ツ瀬川右岸から対岸の祇園原古墳群へとさらに墓域を移動する。祇園原では六世紀後葉にいたるまで首長墓を築造しているが全体的に小型化し、もはや 100 m クラスの大型古墳を輩出することはなかった。

このように、5世紀前葉に覇権を確立した西都原系譜の首長墓は、次第に規模を縮小化し、他の首長系譜との格差が狭まった。広域首長連合の盟主というよりも、一ツ瀬川流域の一有力首長に後退したのであろう。

5世紀後葉以降の地域首長墓の小型化は日向に限られる現象ではない。福岡県岩戸山古墳^{いわとやま}などのような特異な例を除くと、大王墓と地域首長墓との墳丘規模はいちじるしく格差を広げている。こうした現象は、松本塚古墳以降とくに顕著となる。5世紀後葉から6世紀にかけて、王権による地域支配の強化にともなって各地の首長連合(地域政権)は解体ないし弱体化したことが墳丘規模の縮小としてあらわれたのであろう。地域首長は地方に伸張しつつあった王権に対して服属化し、地方豪族へとその性格を転換しつつある姿を示すのではあるまいか。

4. 古墳の変質

6世紀代以降、主要な大型首長墓群は一ツ瀬川の祇園原古墳群と、大淀川流域の^{しもきたがた}下北方古墳群の二つの地域を代表する系譜に集約されてくる。上述したように墳丘の小型化は否めないが、それぞれ墳長 70～90 m クラスの前方後円墳が6世紀後葉まで継続的に築造され、他の首長系譜との格差は大きい。ほとんどの古墳が未調査のため確定できないが、祇園原古墳群などの事例からみると、6世紀前葉以降は列島通有の横穴式石室を採用している可能性が強い。

一方、6世紀中葉以降、これまでほとんど古墳がつかられないことがなかった地域に古墳が出現している。宮崎平野周辺では台地や丘陵の裾部に膨大な数の横穴墓が営まれた。宮崎市にある蓮ヶ池横穴墓群(約 80 基)や池ノ内横穴群(約 40 基)などが典型例だ。また、西都原や祇園原古墳群の大半を占める小型円墳もこの時期以降の可能性が高い。一方、加久藤から都城盆地にいたる内陸部では地下式横穴墓が群集して築造されている。

こうした小型墳墓が密集してつくられた古墳群を群集墳と呼ぶ。おそらく県内の古墳時代墳墓の8割以上が、6世紀中葉から7世紀前葉までの短期間に集中的につくられた群集墳に該当するだろう。そのほとんどが墓室内に複数の遺体を埋葬する家族墓だ。これらを築造した人々は、これまで顕著な墳墓を築造することのなかった地域勢力の構成員であろう。こうした群集

墳の爆発的な築造に関する理解は一様ではないが、ヤマト王権による本格的な地域支配と密接に関連する現象と考えられている。

6世紀末葉を前後して前方後円墳の築造は終焉をむかえ、地域首長墓は大型の円墳や方墳に変化する。7世紀初頭～前葉につくられた西都原古墳群の鬼の窟古墳（直径35mの円墳）や、石船古墳群の新田原44号墳（一辺26mの方墳）などはその典型例だ。これらの古墳を最後に、日向での首長墓の築造は終わる。群集墳の築造がなおしばらく継続するとはいえ、古墳の墳形と規模に社会・政治的諸関係と身分秩序を表示した古墳時代は、実質的に幕を閉じたといえるだろう。

律令国家の登場まで7・80年の時間の間隙があるが、ヤマト王権は乙巳の変（大化改新=645年）や壬申の乱（672年）を経て、急速度で国家的諸制度を整備する。大型円墳・方墳を築造した首長たちが、その後どのような過程を経て律令国家に組み込まれていくのか、その間の事情を物語る考古資料はほとんど知られていない。

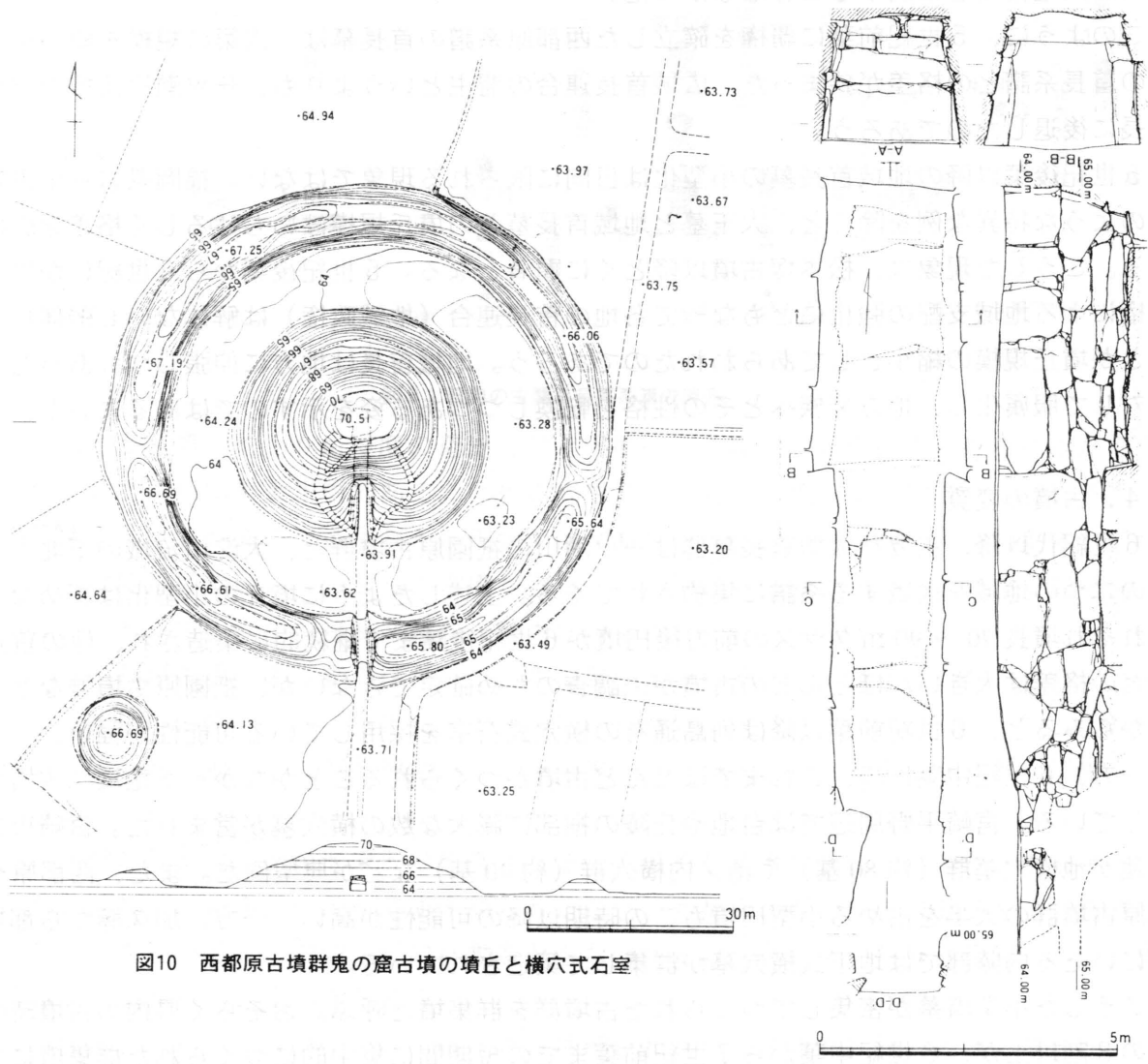


図10 西都原古墳群鬼の窟古墳の墳丘と横穴式石室